

の餘地があらうとは思はれない(第一圖参照)。西域記を精讀すると、巨像の「西南」、谿谷北側の斷崖を負ふ位置にあつたものと知られる。即ち、道路が著しく屈曲してゐる附近に、甚だしく崩壊した處があり、又無數の洞窟があつて其の一部には今でも人が住んでゐるなど、どうも古い昔に人間の住んだ處と思はれる其の場處である。石像の東南、谿谷の南側斷崖上にあつてシャリゴルゴラ Shahr-i-Gholghola (叫びの町)の圓錐城砦の上方にあり、遙に目立つてゐる舊跡に至つては寧ろ一二二一年に成吉思汗の破壊した回教首都の遺跡らしく、これは附帶研究の問題で、今此處に其の判定を急ぐ必要はないから、他日發掘調査に依て決定される時を待つことにする。長老商那和修 Cāṅka-vaśsa の遺物を保存してゐた僧坊のあつた沼澤、多く草木の茂つた谿谷の方位決定に就ても猶更其の推定を慎むことにする。デュリアン Stanislas Julien は東南即ちヘルマンド Helmand 河上流々域の方向と言ひ、ビール Samuel Beal は之に反し西南即ちバンディエミル Band-i-Emir 谿谷、謂ひ換へるとバルク川上流と言つて居る。(此の點に就てはホルディチ著 Gates of India 二五六頁、バルク川はヤク